
新編・夏の疾走

イチゴダイフク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新編・夏の疾走

【Nコード】

N3699M

【作者名】

イチゴダイフク

【あらすじ】

『能力者』たちは危険な存在として隔離され、『外』に出ることができずにいた。外に出たい——そう願う彼らに与えられた、わずかなチャンス。

鬼ごっこに逃げ切れば、夏休みの間だけ、隔離地区を出られる。

『変速』の能力者・ツバメと、眼帯の少女・音亜。二人の距離が縮まっていく中、音亜はツバメの暗い過去と秘密を知ってしまう。

追いかける鬼、能力者同士の戦闘、恋愛、過去の傷、能力の弊害、隠された研究——そして、『ゲーム』の目的。

望まずして異能を手に入れた子供たちの、恋と、戦闘と、疾走の物語。

「来ないでっ!」「美人だから、な!」「どうして俺じゃない」「隷属せよ」「飛べ!」「この『ゲーム』の目的は……」「——戻ってよっ……」「ひれ伏せ!」「『鬼』が来る」「本物の、怪物……」「外に出るんだ」「一緒に、夏祭りに行こ……?」「……ボクは、近づいちゃいけないんだ……」

「ツバメくんは、私が守るから」(本文より抜粋)

出会い（前書き）

読者の皆様こんにちは、イチゴダイフクと言つ者です。

これは「新編」とある通り、作者の一作目を新しく書き直したものです。いろいろ設定が変わっていたり、登場人物が増えたり減ったりしてます。一作目の方の「夏の疾走」を読んでくださった方、是非是非お読みくださいませ。

また、一作目未読の方も、是非是非。

更新が不定期になったり（特に夏場とか……）しそうですが、それでも読んでやるぜーっ！ という方、よろしく願います。

では、もう一つの疾走、はじまりはじまりー（拍手）

（ちなみに。警告タグに「残酷な描写あり」とありますが、そこまですごくグロっちは出てこないと思いますです。へい）

出会い

……

私の人生の歯車は、たった一つ——自分の片眼なんかのせいで、狂わされた。

誰とも関わりたくない。近づきたくない。聞きたくない。見たくない——人の『心』になんて、触れなくていい。

こんな右目、潰れてしまえばいいのに！

出会い

「——ねえ、朝倉さん」

朝倉音亜あさくらおとあが彼と初めて言葉を交わしたのは、中学三年生の春。二人はこのとき初めて、同じクラスになったのだった。

「……何？」

冷めた声で、窓の外をぼんやりと見つめたまま返事した。それなりに和やかだった教室の雰囲気、彼——かんざきつばめ神前燕の行動によって、打ち壊された。無邪気な笑顔で音亜に話しかける燕を見て、教室中がひそひそと、なにやら小声でウワサし合う。

理由は簡単。この特殊な空間の中でも完全に孤立し、誰とも関わりを持つとしない朝倉音亜に、話しかける相手が存在したなんて

音亜の教室での浮き方は、どんなKYでも一目で分かるほどだった。誰とも言葉をかわそうとせず、近寄らず、近寄らせず。彼女の周囲だけが、ぽっかりと、深い溝が掘られているようにさえ思える。

しかもそれに加えて、その端正な容姿も、彼女のことを異質なものに見せていた。カラスの濡れ羽色の髪の毛と、少し病的な感じがするほどに白い肌の対比。女子にしては背が高く、中学生としては抜群のプロポーションを誇っている。中性的でクールな顔立ちと、左目から放たれる絶対零度の視線。長い前髪に隠れた反対側の目は——眼帯に隠されていた。

「邪魔」

燕があれこれと話題を振る途中、音亜は唐突に遮った。まだ授業残ってるよ——そう呼び止める燕を無視して、鞆だけを持ち、教室を出ようとする。様々な感情の入り混じった視線を浴びながら、立ち去り際、音亜は言い放った。

「私に関わらないで。あなたみたいなヒト、大嫌いだから」

出会い（後書き）

一作目の方を読んでくださった方は分かったかもしれませんが、はい。音亜が眼帯をしています。ええ、はい、眼帯でございます。

……。

……べ、別に！ 漫画で眼帯してるキャラが出てきがかっこよかったからとか、そんな安易な理由じゃないんだからね！

一日目（前書き）

読者の皆様こんばんは、イチゴダイフクです。

いやあ、まあ、今日は眠いのもう寝ますです。はい。

……明日から、期末テストなんですけどね！ 中間の数A、赤点ギリギリだったんですけどねっ！！

一日目

一日目

——暑い。

退屈な夏休みも近づいてきた七月、まだ強い夕方の日差しの下。高校一年生になった神前燕は、熱く焼けたアスファルトの上を駆けていた。お気に入りの、小鳥の絵柄のキャスケットを被り直して、一瞬だけ背後を振り返る。淡い青の視線の先には、一人の『鬼』。

夏の湿った熱気の中、漆黒のスーツをピシッと着こなしている。そしてその真面目な格好に不釣り合いな、一本のツノの付いた力チューシャ。目には黒のサングラスをかけていて、表情は上手くうかがえない。『彼女』の右目なら、その思考も見抜くことができるのだろうか。

「あと……」走りながら、腕に取りつけたケータイのサブディスプレイに目をやる。「……十分っ」

残り十分で、一日目の『ゲーム』は終了だ。燕は瞬時に、地図を脳裏に思い浮かべた。隔離地区第二学園の高等部の敷地まで、最短ルートを導き出し——

「『加速』」

——同時に、急加速した。

追いかける『鬼』は反応が遅れ、あっという間もなく、一瞬で距離が開いた。色素の薄い髪を風になびかせながら、燕はまさしく、空を飛ぶツバメのように疾駆する。助走をつけて跳躍し、ビルの屋上へと着地。そのまま燕は、屋上から屋上へと跳び移って逃げていった。常人では為し得ない動きに、置いていかれた『鬼』は腹立たしげに吐き捨てた。化け物め。

燕は、『能力者』だ。

超能力の存在がSFやファンタジーだった世界に突如現れた、異能の子供たち。世界各国の政府は彼らを脅威とみなし、ここ『能力者隔離地区』に隔離することを決定した。外部との接触を断ちきり、『外』から入ってくる情報も最低限度——つまり、また首相が交代したとか、税金が上がりそうだとか、そんな程度しかない。

夏休み、冬休み、春休みなどの長期連休も、当然隔離地区から出ることはできない。そんな退屈な場所で燕は、夏休みを賭けた『ゲーム』に参加していた。

『ゲーム』の内容は、鬼ごっこ。静岡県西部に位置する隔離地区は、一つの大きな市ほどの面積を有していて、そのほぼ全域を使用して行われる。一日の『ゲーム』は、午後一時から五時までの四時間。それを一週間逃げ切ることができれば、ゲーム・クリア。夏休みの間、『外』に出ることができるのだ。

「『外』……かあ。楽しみだな」

ビルの屋上を駆け抜け、燕は勢いよく跳躍した。七階建ての高さから、見事な宙返りを決めてアスファルトの地面へ加速していく。——しかしその細い身体は、途中で不自然に『減速』した。とんつ——と身軽に着地し、燕は何事もなかったかのように、学校までの道を走りだす。

燕の能力は、『変速』

あらゆるモノの動く速さを変えることができる能力だ。先ほど鬼から逃げたように『加速』したり、屋上から飛び降りたように『減速』したり——ごく短い時間だが、『静止』させることもできる。この鬼ごっこにおいては、かなり有利な能力。

「ツバメくん」

学園裏の急坂を上り、裏門に辿り着いたところで声をかけられた。

「あ……」門の向こう側に見知った顔を見つけて、燕は微笑む。「朝倉さんも来てたんだ」

燕は裏門を飛び越えて、高等部の敷地に降り立った。日差しから逃げるように木陰に入ると、音亜も横に並んできた。二人の間にはもちろん、微妙——いや絶妙な距離が確保されている。

「疲れたから、休もうと思って来たの」

「ボクも。今日はあと少しで終わりだし、休憩したいなあって」

日陰を選んで歩きながら、燕はあらかじめ考えておいた隠れ場所へ向かう。体育館を通り過ぎ、トレーニングルームの裏側へ。倉庫との狭い空間を抜けると、トレーニングルーム、倉庫、塀、植木に四方を囲まれた場所に出た。一面背の高い草に覆われていて、外からはまず見えることはないだろう。

「ほら。ここなら絶対見つからないよ」

「確かに見つからないだろうけど……だったら初めから、ここに隠れてればよかったじゃない。なんで逃げ回ってたの？」

「一応、どんな感じか見ておきたかったから。一回『鬼』にも会って、ちょっと逃げ回ってみたり」

「『変速』……だっけ。ツバメくん的能力なら、ケータイ取られるとは思わないけど」

この鬼ごっこは、鬼に触れただけでは負けにならない。能力者たちは左腕にベルトを巻いて、そこに事前に配布された携帯電話を付けている。これを奪い取られると負けになるのだ。

「ん……まあ、油断するのは不味いでしょ」

「ふうん」

と、ケータイが二つ同時に鳴った。サブディスプレイを見ると、『一日目終了』というそっけない五文字が流れていた。

「なんか、結構あつさり終わったね」

「まあ、隔離地区でやるのに『鬼』が二十人しかないのは、ちょっと少なすぎる気もするけど……」

一つの市ほどの広さの中、たった二十人の『鬼』に遭遇する確率は極めて低い。しかも『鬼』は、能力者と違う普通の人間なのだ。対して能力者は、第一、第二学園に、それぞれ約千人ずつの合計二千人。逃げている間も、『鬼』には一度しか遭遇しなかったのに、能力者たちには数え切れないほど会った。

「……ま、いいか。出よう」

音亜に促されて、燕はもと来た道を戻った。まだ日差しの高い空のもと、自宅に向かって長い坂を下っていく。燕はふと、音亜が何か言いたそうにしているのに気がついた。

「何？」

「！……べつ、別に……」音亜は目をそらして距離を取った。「……何でもない」

「そう？」

燕は小首を傾げたが、それ以上訊かなかった。出会ってから的一年間で、彼女との関わり方はだいたい把握している。

「あつ」

坂を下りきった先の交差点で立ち止まると、横断歩道の向こう側

に知り合いを見つけた。タイミング良く青になり、すれ違い際、燕は彼にも笑顔を向ける。

「安藤くんも逃げ切ったんだね」

「まあな……」

同級生の安藤紀彦あんどこのりひこは、いつものようにそっけない返事をした。ツンツンに逆立てた茶髪に、鋭い目つき。不良顔の通り、少々乱暴な性格だが、それでも根はいい人だと燕は思っている。

「……………」

「？」

安藤は一瞬音亜のことは見、それからまた燕を一瞥した。しかし何も言わず、長い坂道へと歩を進める。その背中を見送りながら、燕はまゆを八の字にして呟いた。

「……ボク、嫌われてるのかなあ……………」

「え？」

「ん……何でもない。——そうだ、家寄うちってく？ 確かアイスを買っておいただけだ」

「！」

音亜はいきなり立ち止まり、眼帯のない左目を見開いていた。白い肌が真っ赤に火照っているのは、暑さのせいだろうか。

「どうしたの？」

「……別に。暑いから早く行こう」

「うん……？」

先に行く音亜を、燕は小走りに追いかける。

中学三年生のあの教室。大嫌いだと告げられてから、もう一年以上が経った。それでもボクはまだ、彼女のことを理解しきれてはいない。

一日目？（前書き）

いやあ、今日は期末テストでした。明日は得意の保険と生物と国語ですね。明後日は……え？ 数A？ ……はい、頑張つて小説書きましょーっ！

一日目？

学校へ続く坂道を歩きながら、安藤は一度後ろを振り向いた。早足に進む音亜を、燕が小走りに追いかける。長い髪が柔らかに揺れるたび、夏の日差しに煌めく。

「ちっ……」

思わず舌打ちする。燕が、その整った容姿にも、優しく穏やかな性格にも、優秀な頭脳にも——自分が想いを寄せている相手と、いつも親しくしていることにも。

どうして自分が、あんな人づきあいの悪い、クラスでも浮いていた少女に心惹かれてしまったのか——

——それは、きっと……あの左目ににじんだ哀しみに、気づいたからだ。

朝倉音亜の隠された一面に——誰にも見せない哀しみ、弱さに気づいているのは、自分だけだと思っていた。しかし一年前に知った。神前燕も、音亜の弱さに気づいている。そして自分よりも、優しく、慰め、支えになるうとしている。

「むかつくんだよ……」

——どうして俺じゃない。

燕と出会ってから、本当に少しずつだが、音亜は変わった。安藤も含めた他人とも少しは話すようになり、会話をかたくなに拒んだ

り、無視しなくなった。

自分にはできなかったことを、燕は簡単にやってのけた。

「……なんで、あいつは——」

——あんなにも、恵まれているんだ。

——俺と、こんなにも差があるんだ。

——どうしてっ……

「よっ、安藤」

学校の正門前。端正なルックスの少年が、ニヤリと笑って手を振った。

「ちっ……」今日は嫌な奴によく会おう日だ。「……何だよ、野々山。エロトークに構ってる暇はねえんだが」

「まあそう言うなよ。どうせお前、デートする相手もない暇人だろう?」

「彼女がいねえのはお前も同じだろうが」

「俺は、誰とでも付き合いたいとは思わないんでね。可愛い子じゃなきゃ」

「変態野郎」

「ひひっ、変態呼ばわりはねえよ」野々山椿^{つばき}は愉快そうに笑い、宣言する。「俺は変態じゃなくて、変人だ」

「どっちも大して変んねえつつうの……」

大きな溜息をついて、安藤は目の前の変態——自称・変人に訊ねる。

「っで？ この俺をわざわざ呼び止めて、何か用か」

「おお、よくきいてくれたな」

野々山は相変わらずニヤニヤ笑いを顔に張り付けたまま、嬉しそうに語りだす。安藤はその様子から、女性絡みの話題だと予測した。

「ほら、神前ん所の世話係さんいるだろ？ 黒羽^{くれば}さん」

「ああ……あのヒトか」

燕の家で住み込みで働いている若い女性だ。音亜と同じく美人だが、彼女には大人の魅力がある——らしい。

「でさあ。さっき俺、黒羽さんに会ったんだけど、なんか気になることきいて」

「何だよ？」

「なんかこの『ゲーム』、いろいろと大変になりそうだって。今日

は無かったけど、明日からはミッションとかがあるんじゃないかってたな」

「ミッション？」

初耳だ。

「それから、対能力者用の道具なんかも用意されるっばいぜ」

「そんなものまで……って、なんであの人は、そんなこと知ってるんだよ。『ゲーム』に参加してる俺たちすら知らねえのに」

「さあね。——でもまあ、俺はあのヒトを信じてるけど」

「……………」燕のようなセリフに、安藤は一瞬顔をひきつらせた。

「……………」なんで？」

「決まってるじゃん」

野々山は一層大きく笑う。

「美人だから、な！」

……

燕の家。リビング。なんだかんだ言って初めてやって来た空間で、音亜は思わず立ちすくんでいた。視線の先には、とびきりの美人がいる。

「ツバメ様、おかえりー」ソファに寝転がって見ていたテレビから目を離し、こちらを見上げる。「……あつ、お友達？」

「初めまして。ツバメくんの……友達、朝倉音亜といいます」

「黒羽……また昼間から、そんなお酒ばかり……」

黒羽に自己紹介する音亜の横。燕は頭に手をやって、溜息をついた。

燕の世話係をしている小糸黒羽^{こいとくろは}は、美人だ。頭も切れ、与えられた仕事も難なくこなす。しかし——だらしなかった。ソファの前のローテーブルには、ビールの空き缶が散乱している。趣味のいいスーツも適当に着崩していて、『鬼』の方々を見習わせたい。

「別にいいじゃない、自分の給料で買ってるんだから。——ツバメ様は『ゲーム』に行っちゃって暇だったし。なんか、綺麗な女の子連れ帰ってくるし……」

ショートヘアをわしゃわしゃとかき乱しながら、黒羽は口をとがらせた。テーブル片付けといて。そう言って燕は、アイスを取りにキッチンへ向かう。

「あの」

「ねえ」

何か言おうとして、言葉が重なった。互いに顔を見合わせる。音亜は黒羽に譲ろうとして、黒羽がテレビに釘付けになっているのに気づいた。

ニュースは『外』で流れているものだ。――……の調査結果によりますと、現在、国内の隔離地区に収容されている能力者の中にも、多数の能力を併せ持った『複合能力者』が五名程度いるとされ……」

複合能力者というのは、キャスターの言葉の通り、複数の能力を持つ能力者のことだ。通常的能力者よりも圧倒的に人数が少ないため、音亜の知り合いには――そもそも昨年までのせいで、友人が少ないのだが――いない。

「？ どうしたの、黒羽」

「えっ？ ああ、別に。――ツバメ様がやらなくても、言ってくれば私が用意してあげるのに……」

「黒羽に頼んだら、絶対つまみ食いするでしょ」

「ま、そーだね」

黒羽はちらと音亜のことを見た。ニュースではまだ、複合能力者のことをやっている。ただでさえ危険な能力者が、二つも異能の力を手に入れたら――と、怖がって見せる厚化粧の年増。怪訝そうにする音亜から目をそらし、黒羽はさりげなくチャンネルを変えた。

……

「ツバメ様」

夜、音亜が帰宅した後。夕食を終えると、黒羽は言った。

「今日始まった『ゲーム』だけど、気をつけた方がいいよ」

「？ ミッションのこと？」

ミッションのことなら、音亜がいるときに聞いた。とりあえず明日は、様子を見るために学校に隠れようと言ったことになったのだが。

「ううん。そっちじゃなくて……対能力者用武器」

「……………」

燕の表情から穏やかな微笑が消えた。複雑な表情でうつむく燕に、黒羽はあくまで静かに言う。

「もしものときは『能力』を使えば何とかなるだろうけど、使いすぎないで」

「……………分かってる」

呟き、右手に目をやる。細く白い手——その指先の腹から延びる、赤みを帯びた極細の線……

「……分かってるよ……」

過去の傷から目をそらし、燕はリビングを出た。

一日目、終了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3699m/>

新編・夏の疾走

2010年10月9日19時14分発行